

加藤 昌彦

タイ側のカレンとビルマ側のカレン
現在、最もふつうにカレン人というときには

卷之三

此のシノハニホウ
セイタツヒキ
セイタツヒキ
セイタツヒキ
セイタツヒキ

かとうあつひこ
加藤 昌彦

ればごく一部に過ぎないのである。

タイの純朴な山岳少数民族、あるいは反ビルマ武装闘争の首謀者として描かれてきた力レン入。その実態は大半がビルマ側、しかも平地で一般的市民生活を送つてゐる。従来あるとされてきた帳をあげ、ビルマの力レン入の心のふるさとを訪ねる。

日本ノア・リバーフロント、今古

ンマー）側に住んでいる。大半がビルマ側に住むにもかかわらず、従来、カレンについての報告はタイ側からなされることが多かつた。その最たる原因はビルマ側の情勢にあるとい

威容をほこるゾエカビン山とパアンの町並み。ゾエカビン山はカレンのシンボル的存在である

のタイの山奥に住んでる人たちですか?」という答えが返ってくることもよくある。カレンに思い入れの深いわたしにとつて、カレンについて少しでも知ってくれている人が増えてきたのは大変うれしいことだ。反面、「山奥」ということについては、そればかりではないのになあと、ちよつとがっかりしたりもする。

北タイの山岳地帯をめぐるトレッキング・ツアーオンに参加すると、昔ながらの生活を送る山地カレンに出会う。また、カレンを対象とした研究書においても、あるいはマスコミの報道においても、そこに描かれたカレンの人びとは、かぎりなく純朴な山岳民族としての姿であることが多いようだ。だがじつは、カレンのこうした一面はカレンの人びと全体から見

続けてきたため、カレーン州やイラワジ・デルタなど
カレン人口の多い地域に入ることは困難を極めた。
こ最近ようやく変化の兆しが見えてはいるもの
の、カレンについて知ろうとする者にとつて、この
状況は大きな足かせとなってきた。いきおい、カレ
ンの人びとについての情報や資料の収集はタイ側で
なされることになり、それに基づいてカレン全般に
ついても語られることになる。

に参加すると、昔ながらの生活を送る山地カレンに出会う。また、カレンを対象とした研究書においても、あるいはマスコミの報道においても、そこに描かれたカレンの人びとは、かぎりなく純朴な山岳民族としての姿であることが多いようだ。だがじつは、カレンのこうした一面はカレンの人びと全体から見

岳地帯で送っている人びとが多い。けれども、ビルマ側に行つてみると、むしろそのような生活をしている人に出会うのは難しく、逆に、平地でそれも都市部近辺で生活している人が多いのである。実際、カレン人全体としては、平地で暮らす人びとのほうが多い多數派である。

わたしはタイ側の山地カレンのイメージにかたよったカレン人像の描きかたを指して、次のようにたとえることがある。まるで、奥多摩だけを見て首都東京の都市問題を論じるようなものだと。これまで、カレンが武装闘争を始めた経緯については、純朴な山地カレンがキリスト教宣教師によって知恵と反ビルマ意識を吹き込まれ、反ビルマ闘争へ立ちあがるという、いわばキリスト教化に過度の責任を負わせる図式で語られることが多かつた。じつは、このステレオタイプも、全体としては多數派である平地のカレンの存在を忘れ、タイ側でよく見る「純朴な」カレンのイメージだけにとらわれた結果、できあがつてきたように思われてならない。

以下では、このような状況への反省を込め、今まで平地のカレンのなかでも、とくに外国人の注目を浴びることの少なかつた、カレン州に住むボー・カレンたちについて紹介したいと思う。

仏教ボー・カレン文字を生み出した人びと

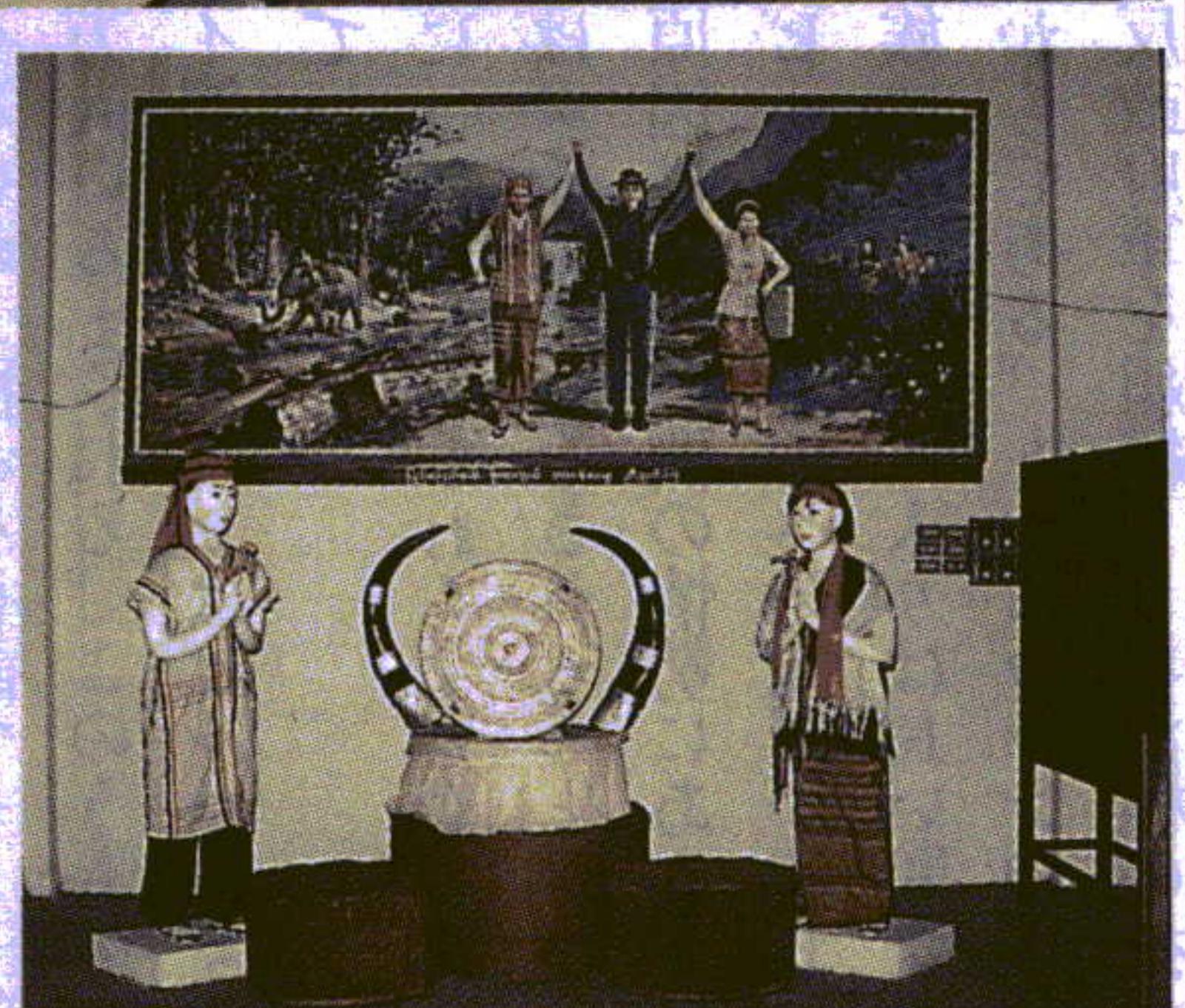
わたしはビルマ留学中の一九九四年四月、ようやく取得した、たつた六日間の旅行許可証を携えて、カレン州の州都パアンを訪れた。パアンは、ビルマに住むすべてのカレン人の心のふるさとともに言われる。郊外には石灰岩質の奇峰ゾエカビン山がそびえ、カレン州のシンボル的存在にもなっている。首都ヤンゴンを車で出発して東進すること六時間、サルウイン川の向こう岸にパアンの町とゾエカビン山をこ

の目で確認したときの感動は忘れられない。やつとカレン州に来たという実感であった。カレン州は長い間外国人には閉ざされていたのである。出雲五わたしがパアンを訪れた目的は、東部ボー・カレン語が話されている実際の雰囲気にひたることだつた。東部ボー・カレン語というのは、ボー・カレン語のうち、カレン州周辺で話されてゐる言語のことである。わたしはそれまで、この言語を、実際の生活から切り離された場面でしか調査していなかつた。ここでカレン人の言語について少し説明しておく必要があるだろう。狭義のカレン語にはスゴト・カレン語とボー・カレン語があり、このふたつの違いは外国語と言つてもよいほどで、学習したのなければまつたく通じないと見てよい。さらに、ボー・カレン語は東の方言と西の方言にわかれており、これまた学習しなければほとんど通じない。そのためカレン人の多くは、カレン語には三つの種類があると考えている。



見習い僧に仏教ボー・カレン文字を教える僧侶。カレン州の僧院の多くはこのようにして子供たちに文字を教えている。パアン市内のチャートーヤ僧院にて

字を刻んだものである。西洋の文献には、よくカレン人が初めて文字を持つたのは、アメリカ人宣教師ウエイドが布教のため一八二〇年代にキリスト教スゴト・カレン文字を発案したときだという説明がある。しかし、それより以前に、ボー・カレンたちがモン文字を利用してボー・カレン語を書き表していなかつたとは断言できない。



カレン文化博物館の内部。中央下はカレンのシンボル、銅鼓と角笛。軍人と手をつなぐカレンを描いた壁の絵からは、ビルマの少数民族の立場のむずかしさが感じられる

れていなかつた。

わたしは、パン市内にあるカレン文化博物館で貝葉の現物を見せてもらひ、比較的古い時期の仏教ポー・カレン文字を読ませてもらうことができた。

わたしはこの旅行で少なからず充足感を得たのであるが、ただひとつ気になることがあつた。旅行中ずっと役人の尾行を受けていたことだ。毎日のように尋問も受けた。このことはビルマ政府がいかに少数民族問題に敏感であるかのあかしでもある。

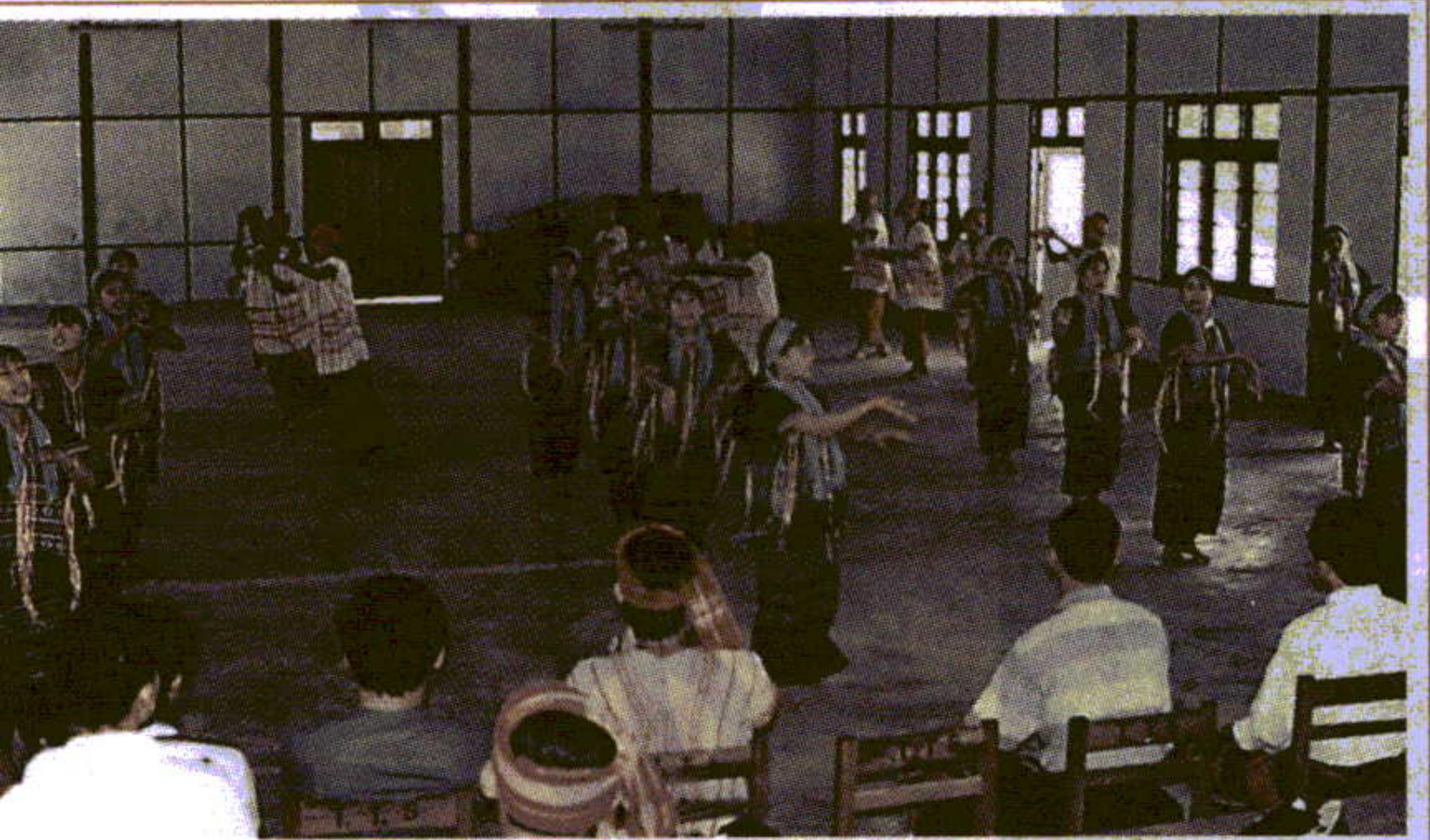
「ミャンマー観光年」のパンアンにて

ツ・イエードゴン僧院やアテツ・イエードゴン僧院などの僧院も見ることができた。案内してくれたフレンの友人たちに共通して感じたのは、独自の文字を持つほどまでにいたつた自分たちの文化にたいする誇りのようなものだつた。

滞在中、まる一日かけてソエカビン山に登った。晴れた日なら頂上から遠くアンダマン海のほうまで見わたせる。カレン州のシンボルにもなっているこの山は、ビルマで出版されたカレンについての本になら、必ずといっていいほど挿し絵などの形で出てくる。カレンの友人たちが、みな、雄々しくそびえるこの山がカレンの人びとの心のより所になつていると言ふ。

幸運だつたのは、滞在中ちようどパアン市内で開催されていた、子供たちを対象とした仏教ポー・カ

レン文字の夏休み合宿講習会を見学することができたことだつた。この講習会は毎年若者たちが中心となつて、自主的におこなわれている。ビルマでは、ふだんの授業で少数民族語を教えることは難しい。その民族の児童数全体に占める割合など、さまざまなもの条件を満たさなければならぬからである。そのため、正規の



ダン舞踊の練習風景。はげしいリズムにのって踊り続けるため、踊り手はくたくたに疲れる

子供たちにカレン文字のつづり
かたを覚えこませるのである。

毎回ひとりで朗唱させられ、おいに恥ずかしい思いをした。このように詩を読ませることで

（前編）の出家が多い）にカレン文字
が多く、どのように教えている
のか興味があつたからである。
午前と午後一回ずつ、約一時間
ほど、小僧さんを集め、仏教の
教えをカレン語の詩にしたもの
を読ませる。読むときには独特
のふしをつける。わたし自身も
毎回ひとりで朗唱させられ、お
おいに恥ずかしい思いをした。

今年の一月末、わたしはビルマに入り、調査のためカレン州パンを再訪した。前回来たときには旅行者用の宿泊施設はほとんどなかつたが、今回は小さいけれどもこぎれいなホテルが二、三軒たつているのを見て驚かされた。今年は「ミャンマー観光

記念日の祝典のために、カレン州の代表として派遣されるドン舞踊団が毎日練習をしていた。ドン舞踊というのは、合わせて三〇人以上の男女が、幾何学的な隊列を組みながら踊る、華やかなポート・カレン独特の集団舞踊のことである。

学校教育からは離れたこのような形
で言語文化の維持活動がおこなわれ
ているのである。このときの参加者
は二〇〇人を下らなかつた。

この時期、パアンでは、一月一日にヤンゴンで開かれる連邦

加藤昌彦 第五研究部助
栃木県生まれ。言語学者。

加藤昌彦 第五研究部助手
栃木県生まれ。言語学専攻。東南アジアの主として
カレン系およびビルマ系言語を研究している。現在
東部ポー・カレン語文法を書き上げるための調査を